

ダイアナ・ウォン「グローバル・シティの記憶『シンガポール物語』」について

斎藤 照子

司会の内海先生が説明されたような事情で、急速にプログラムが変わり、

ダイアナ・ウォンさんの論文の紹介とそれに対するコメントを、ここで私（斎藤）が、まとめて行うということになりました。私自身は経済史を専攻しておりまして、経済史の分野では「記憶」というイシューはまず論じられることがあります。グローバル化とか市場対国家、国民経済、あるいは経済ナショナリズムというような用語はなじんでいます、それからカウンター・ヒストリーということではあるいは共通項もあるかと思いますが、「記憶と歴史」というセミナーで物をいうような資格は欠けているといわざるを得ません。そういうわけで私の要約、問題提起ともに至らない点が多々あると思いますが、ご容赦していただければ幸いです。

最初にダイアナ・ウォンについて、私がどういう接点を持ったかという話からさせていただきたいと思います。一九九六年に、シンガポールの東南アジア研究所に客員研究員として一年赴任したことがあります、そこ

でその当時副所長をしていたダイアナ・ウォンを知ることになりました。

彼女はとても素朴で暖かな人柄ですが、同時にきわめて明晰な頭脳の持ち主で、毎週のように目白押しにあるセミナーあるいは国際会議では、彼女が出席するか否かでそのセミナーの水準がだいぶ違ってくるように常々感じたものでした。きょう、事故によって彼女の参加が望めなくなったのは本当に残念です。

ある日、ダイアナが私に日本軍によるシンガポール占領の展示がセントーサにあるということを教えてくれました。私はシンガポールから発信される戦争の記憶としては、一九七〇年代の「星洲日報」の記事などの印象がつよく、体調の万全のときに見に行こうと思いましたが。体調の悪い時では、シンガポールで日本軍が行ったさまざまな残虐行為の記録を直視する自信がなかったからです。

そして、ナショナル・ミュージアムに出かけたのですが、そこで私は自分の思い込みが覆されるのを感じました。私にとっては思いがけない展示

でした。展示やビデオで明らかにフォーカスが当てられているのは、一九四二年二月十五日という日付、つまり山下奉文率いる第二十五軍がシンガポールに侵入してきたという歴史の特定の瞬間です。その決定的な瞬間に、宗主国であるイギリスがいかに無力であったかというところに、大きな焦点があたっていました。たとえば、日本軍が侵入してきたとき最高責任者は夫人を伴って映画を観ていた、しかも、重要なオフィスと武器庫の鍵を自分のポケットに入れていた、ですから他の人たちが事態に気づいても為す術がなかったといったような話が大きく取り上げられていました。

私が緊張しながら心の準備をして出かけた、日本軍の残虐行為等に関してはほとんど触れられていません。わずかにオーチャード・ロードにあったY M C Aの建物が接収されて憲兵隊本部になっている写真が一葉展示され、そこに建物の中では毎日拷問が行われていたという説明が加えられているだけでした。私はベネディクト・アンダーソンの著名な書物などによってミュージアムとかエキジビションというものが、ポリティカル・メッセージであるということは、知識としては頭に入っていましたけれども、このナショナル・ミュージアムの展示の意味を整合的に理解することができずに、混乱した気持で帰ってきました。

そしてダイアナに「あの展示は一体何なのだろう」という疑問をぶつけると、彼女は車をみずから運転して、戦争にからむさまざまな場所を見せて説明してくれました。例えばチャンドラ・ボースがデリーへという有名な演説をしたと言われる広場、それから公的な展示や言説の中では決して触れられないことのない、タン格林・ロード界限、この道路にはインドネ

シアから連れてこられたルームシャ（労務者）が飢餓や病気で収容所から逃げだしそのまま亡くなる、そうした死体がたくさんあったという場所ですが、ここらには今では贅沢なホテルや瀟洒な商業ビルが立ち並び悲惨な歴史の跡形もないわけですけれども、そういうことを教えてください。この小さい島にさまざまな戦争の記憶をとどめた場所がひしめいていること、しかし、ある記憶は選択的に選び出され、他の記憶は埋もれたままにむしろ消滅することが期待されているということを実感し、記憶をめぐる政治ということに初めて気づいたことでした。

それからまもなくして、ダイアナが一つの論文を私に見せてくれました。それが「記憶の抑圧と記憶の生産―日本によるシンガポール占領」という一九九六年にハワイ大学で開催された国際シンポジウムのために書かれた論文です。これは従来社会的経済的な仕事を多く発表してきた彼女にとって新しい研究分野である「記憶の政治学」の最初の論文とやってよいと思います。次に戦争の記憶をめぐる、ダイアナは昨年雑誌『世界』八月号に翻訳された「戦争の記憶と歴史の物語、シンガポールのつくられた過去」という論文を書いています。これらの論文、それからきょうの会議に提出されているペーパー、「グローバル・シティの記憶―シンガポール物語」の三篇はおたがいにかなり重複していて、テーマが響き合っているものです。

第一の論文「記憶の抑圧と記憶の生産―日本によるシンガポールの占領」は、その前年に書かれた著名な東南アジア史家、アンソニー・リードの論文に触発されながら書かれたものです。アンソニー・リードの論文の

タイトルは「リメンバリング・アンド・フォーゲッティング・ザ・ウォー」というふうになっています。第二次大戦終結五十年の時点に当たって、オーストラリアあるいはヨーロッパでは、大々的に記念行事が行われ祝祭の様相をも呈しているのに、もっとも激しい戦場になった東南アジアはたいへんひっそりしている。これはどうしたことかということを問うている論文です。

これに応えるような形で、ダイアナの論文は、シンガポールの場合には、東南アジアのなかで一つの例外であるということを言っています。シンガポールでは、むしろ戦争の記憶が今呼び起こされている、そして新しいナショナル・ヒストリーを形成する一つの道具になっているということを指摘しています。アンソニー・リードの論文では、戦争を想起するあるいは忘却する主体としては、それぞれの国あるいは地域などが想定されていると考えられますが、ダイアナの論文では、記憶の抑圧あるいは生産という言葉が使われ、主語がはつきりするような形で書かれています。これを読んだ時、私はシンガポール論として目が覚めるような論文であると感じました。シンガポールの政治をこれだけ見事に解剖した論文というのはなかなか無いのではないかと思います。

その最初の論文のなかで、ダイアナは、記憶の政治、忘却の政治を語っています。記憶の政治、忘却の政治は、シンガポールにおいては、日本軍政時代に端を発し、日本軍は権力のテクノロジーとして組織的かつ徹底的に記憶と忘却の政治を行ったのですが、これは、軍政とともに終結したわけではなく、戻ってきた植民地主義者によっても、あるいはまた独立をな

しとげた戦後のポスト・コロニアルの国家においても、引き続き行われてきたと、鋭く指摘しています。

第二番目の『世界』に掲載された論文はそれを踏まえて一九九二年から九五年にかけて経済、情報のグローバル化が進む中で、それ以前はむしろ歴史を学校教育から抹消し、過去はなかったごとく振る舞ってきたシンガポールにおいて、再び新たな建国神話が必要になってきた、そして戦争の記憶を動員して、壮大なナショナル・ナラティブを引きだそうという試みが行われている、ということを論じています。この論文では、ダイアナは記憶の政治において呼び戻されているのが誰の記憶であるか、どの記憶であるか、それを問わなければならないと論じています。戦争の記憶の多重性を指摘し、オルターナティブ・ナラティブの必要性を示唆して結論としています。

きょう皆様のお手元に配られている彼女の論文は、この先行する二つの論文とかなりの部分が重層しています。そしてまた新たな展開も示していると思います。彼女が何を言っているか、ごく簡単にまとめてみたいと思います。

第一節はイントロダクションにあたりますが、ダイアナはこれを一九九八年七月の政府主催の国民教育エキジビションから始めています。その開催場所はハイテク商業センターであるサンテック・シティという新しいビルディング。そこで「シンガポールの物語・ハンディキャップの克服」というタイトルで、大々的なマルチメディアを使ったプレゼンテーションが行われたという紹介から始まります。膨大な国家資金を投入し、多くの学校

生徒あるいは公務員、それから他の住民を動員しつつ行われたこのエキジビションは、建国以後、しばらくの間、学校のカリキュラムからも放擲されていた歴史が、国家に華々しく戻ってきたことをたいへんよく示していると述べています。

続けて同年の八月には初代首相のリー・クアンユーの回想録が大々的な宣伝をとまって出版されるのですが、その回想録のタイトルも同じ「シンガポールの物語」であったということを指摘しています。歴史と同時に回想録、つまり記憶も現在の政治に戻ってきた、しかも、歴史が記憶から生み出されるということ、記憶が歴史を正当化するということが、同義であるかのような顔をして戻ってきたと表現しています。こうした記憶と歴史をめぐる公的な言説、すなわち政府の後押しによる記憶と歴史の政治の復活は詳細な検討に値するだろうというのがイントロダクションです。

次にダイアナは、このペーパーの課題を二つ設定しています。第一の課題は、権力のテクノロジーとしての記憶の政治を、植民地国家からポスト・コロニアル国家の時代まで辿ること、そして第二の課題は、公的な言説における華々しい歴史の復活を、そのなかで過去がいかに位置付けられているかという点から検討することです。そうした検討を通じて、現在と未来の国家イメージをグローバル・シティとして表象し、過去は地理として表象するというオフィシャル・ナラティブは、そうしたものである限り、土地に根ざした記憶、すなわちヴァナキュラーな記憶には場所を与えることはできない、という結論が導かれています。

第二節は、権力のテクノロジーとしての記憶の政治という問題を扱って

います。先に簡単にご紹介した第一論文のなかでも既に、権力のテクノロジーとしての記憶の政治は、日本の軍政をもって嚆矢とする、しかし、それでは終わらずに戦後戻ってきた植民地政府によっても、その後の独立後の政府によっても組織的に行われ続けてきたということが明らかにされています。一九四二年二月十五日は先述のとおりシンガポール陥落の日ですが、日本軍はその翌日、すなわち入城二日目に、シンガポールの名前を昭南と改めます。つづいて、徹底的な記憶の抹殺が行われ、日本軍はイギリス支配の痕跡をとどめる場所の名前をすべて、交通標識から看板から会社の名前にいたるまで強制的に変えさせて、徹底的にそれ以前の場所のアイデンティティをぬぐい去ったということが書かれています。

さらに場所の記憶にとどまらず、時間についても再設定が行われます。昭南となったシンガポールの時計の針は、東京に合わせて一時間半進められ、一九四二年は皇紀二六〇二年、昭和十七年とされます。それからそのカレンダーに合わせて新たな公式行事が実施され、明治天皇の誕生日、神武天皇の伝説的な即位の日などに記念式典が行われ、学校生徒・公務員等が動員され、東方に向かっての礼拝が強要されたことを述べています。

ダイアナがここで日本軍政の注目すべき特徴としてあげるのは、大々的に大衆動員の記念式典を行い、新たなパブリック・メモリーを形成していくというその手法です。ベネディクト・アンダーソンらが、日本の軍政が西欧の植民地支配に比較して、物理的な暴力を特徴としていたということをつとに指摘しているわけですが、ダイアナは、日本の支配においては、シンボリックな暴力の力も同様に著しかったということを強調しています。

日本軍による記憶の政治は非常に容赦なく、過酷なものであった。すべてのイギリスの痕跡は、ぬぐい去られなければならなかった。そして、公私の領域における過激な改名（リ・ネイミング）と改暦（リ・タイミング）が、イギリス植民地支配の記憶の抹消を行い、そのひっくり返った世界において現実を押された、新たな空間的、時間的な刻印が、目覚しい説得力を持ったと述べます。私的な記憶は、その時空の繋留点を失い、記念の行事の演習を通して創造された、従来存在しなかった公的な記憶のなかに埋没せねばならなかった、と論じています。

次に第三節では、記憶の政治の再発見ということを扱っています。一九四五年九月十二日に植民地支配が復活するわけですが、その後しばらくの間は二月十五日、すなわちシンガポール陥落の日、当然ながら記念されません。独立後の開発国家もまた、この日を公式な記憶から抹消してきたのですが、シンガポール陥落の五十周年に当たる一九九二年は、公式な記念式典の復活を見た年であると述べています。この時点では、政府もいくつかの行事を企画したのですが、それだけでなく、多くは民間の豊かな記憶の蔵からその衝動が発していたということを言っています。シンガポール・ヘリテージ・ソサエティのようなNGOがスポンサーになった企画も、目白押しであったということです。

一九九二年には、そのように政府はささやかに戦争の記憶の復活を行ったのですが、それが年と共に強まってくる。一九九五年、戦後五十周年になると、戦争の記憶に対する政府の取り組みは圧倒的であったと言っています。一般的には、追憶の儀式のために呼び起こされる公的な記憶という

のは、儀式が終わると再び日常の中に埋められ、必要なときがめぐってくるまでは眠りこまされるのが通例なのですが、シンガポールにおいてはそうではなかった。政府による記憶の政治の再発見は、国家の新しい歴史の物語「ザ・シンガポール・ストーリー」の創出につながっていった。そしていま、その物語をパブリックな記憶のなかに刻みこむための、大々的な活動が行われているのだと言っています。

さらに一九九六年になりますと、戦争の記憶はナショナル・ヒストリーあるいはナショナル・エデュケーションのなかに、がちりと包摂されるようになる。この年のエキジビションを見て私はその意味を把握できなかったと冒頭で申し上げたのですが、ダイアナの論文を通して振り返って見ると目から鱗が落ちる思いです。シンガポール陥落の日、二月十五日は国防記念日（トータル・ディフェンス・デイ）として記念されることになりました。宗主国イギリスは、植民地臣民であるシンガポリアンを守るのに全く無力であった、我々がこのシンガポールを守らなければならない、そういう物語になっていくわけです。国防記念日となった二月十五日には、すべての学校でさまざまな行事が行われるそうです。作文のコンペ、ドラマ、模擬戦争、作戦ゲームなどから、戦時の常食であったタピオカを食べる会など、たくさんプログラムの用意され、子供たちに国家への共通の感情を育て、過去が現在にいかにつながっているかを理解させる取り組みが大規模に行われるようになったそうです。

しかし、政府の国民教育委員会は、子供たちに国家への共通の感情を育てていく必要を満たす手段を、歴史という学問にもとめているのではなく、

過去がいかに現在と未来に関係しているかということは、集合的記憶を公共の文化や公共の空間に刻むことによつて理解させることができると思われているのです。シンガポールの学校カリキュラムの中に、八〇年代の中頃になって、歴史が復活したのですが、政府は歴史学の必要性は必ずしも認めず、むしろ記憶を空間や文化のなかに刻みこむことによつて、目的を果たすことができると考えているわけです。

そして記憶されるべき歴史として、このペーパーの冒頭に触れられている約三十分のシンガポール・ストーリーという大スペクタクルが編集されて、上映されている。記憶は刻み込まなければならない、しかも国家の大々的な儀式として、つねに繰り返し演じられなければならないとばかりに展開されているのが、現在のシンガポールにおける記憶の政治であるということです。

第四節がこのペーパーの新しい展開かと思いますが、「グローバル・シテイの記憶」というタイトルがついています。一九九九年に上梓された『記憶と欲望（メモリーズ・アンド・ディザイヤーズ）』という詩集があるそうです。このなかで編集者が「多くの詩が深い喪失感と過去への渴望とリわけシンガポールの急速な変化のなかで失われていった場所、チャングーやチャイナタウンに対する喪失感と渴望を表現している」と指摘しているそうです。ダイアナは、この深い喪失感、過去への渴望を、公的言説と対比して考えてみたいと言っています。

一九九五年以来、シンガポールにメモリー・サイト、これはこの会議のキー・タームである「記憶の場所」ということではなくて、政府によつて

記憶されるべき史跡、場所と定められた地点のことですが、これまでに四十五のそういうサイトが指定されているようですが、その中には建物など記憶がまつわる具象的な存在は、極めて少ないことが指摘されています。例えば、先に触れたオーチャード・ロードのYMCA、これは憲兵隊が置かれ、査問と拷問が行われた場所ですが、建築学的にも非常にユニークな建物だったようです。これは七〇年代に取り壊され、今は何の変哲もないような建物に変わっているそうです。

一九九二年に、カナダ人の地理学者が出した『シンガポール、リポリューション・オブ・テリトリ』という本があるそうです。この筆者は「リポリューション・オブ・テリトリ」という言葉で、六〇年代の古い地理的な風景、それはとりもなおさず情緒的、心理的な風景でもあるわけですが、それが包括的に組織的に破壊されてきたことを示しており、このように過去の具体的な身体、そこには記憶がまつわりついているわけですが、その抹消は恐らく住民によつて深い喪失感として体験されるのではないか、というふうに結んでいるそうです。この本はシンガポールでは一般的な販売は禁じられて、大学図書館のなかでのみ閲覧可能とされていると、ダイアナは指摘しています。

シンガポールの建国初期においては、その公的記憶から、そして学校教育からも過去は抹消されていたわけですが、それはその後の七〇年代、八〇年代における、大規模な過去の物理的実体とそれにまつわる記憶の抹消につながっていくと述べています。家屋・礼拝所・学校・商店・街路などが、跡形もなく消え失せたと述べています。

なぜ過去は抹消されねばならなかったのでしょうか。一九四二年二月十五日、シンガポールの陥落という青天の霹靂というべき経験によって政治的覚醒を行った、巢立つたばかりの独立国家の新しい設計者たちにとって、過去が意味するものは、植民地支配の屈辱的な百四十六年であり、シンガポールに移ってきた移民のさまざまな過去であり、第三世界の貧困と後進性であった。元外務大臣のラジャラトナムは、『我々には集団的ロボトミーが必要であった。そしてそれを行った』と、すなわち過去を忘れねば生きていけなかったという意味でしょうが、そう語ったそうです。シンガポールの独立を、人々を否定さるべき過去から解放することとみなした、新しく、かつ壊れやすい国民国家の設計者たち、という文脈で、過去の抹消は、理解されるだろうと言っています。

最後の部分に入りますが、ここでダイアナは、では現在の公的な言説における歴史の華々しい復権は、過去を忘れてきた、むしろ抹消してきたシンガポールの従来の道筋からの決別なのであるうかと問題を立てています。リー・シェンロン、彼は副首相でリー・クアンユーの息子でもあります、その談話を引いて検討を加えています。この談話、それはとりもなおさず、「シンガポールの物語」を語ったものですが、これを注意深く読めば、そこには過去からの決別ではなく、連続性が読みとれると言っています。この言説のなかでも過去は否定的なものとして言及されています。ここでは、歴史は「以前」と「以後」の時間的二分法によって弁別され、「以前」が意味するものは苦しみ・闘争・暴動であり、その後に現在が始まっているとされます。否定さるべき過去という公的記憶の構造が変わっていないこ

とをここで確認して、ダイアナは次の問題に移ります。

次の問題とは、現在にとつて過去とはいつから始まるのだろうかという問いです。ここで、物語の開始時点の選択は、それに沿って物語が形作られる基本的な土台を作るものであるという重要な指摘があります。上記のリー・シェンロンのナラティブのなかでは、一八一九年のラッフルズによるシンガポール建設についてもわずかに言及されていますが、過去の開始時点として採られているのは、一九四二年二月十五日、シンガポール陥落の日ようです。

一二九九年、これはシュリヴィジャヤ王国の王子によつてシンガポールが建設されたという伝説上の年号ですが、この年をシンガポールの過去の開始点として採用したらどうかという歴史学者もいるそうです。もしこの開始時点をとると、シンガポールはインド洋と南シナ海に広がる、より広い海域世界のなかに位置づけられることになります。この説は、公的な言説の採るところではなく、反対にこうした過去は完全に抹消されています。シンガポールの過去からの解放というのは、そのように特定の歴史からの解放だけでなく、特定の地理からの解放をも意味しているのです。一九四二年を過去の開始時点とすることは、シンガポールの現在をグローバル・シティとして表象することに貢献している、とダイアナは論じます。

グローバル・シティという用語は、先述の「集団的ロボトミーが必要であった」と言つた元外務大臣ラジャラトナムが、最初にシンガポールに対して使つたそうですが、自然の地理に制限された土地という概念に対比す

るものとして構想されています。地理の外部に位置するグローバル・シティということです。地理に根ざした歴史的記憶は消されなければならない、なぜなら、地理に根ざした過去からの延長としてシンガポールを構想すると、シンガポールは他の国になってしまうからだと言うのです。インドであれマレーシアであれ、インドネシアであれ、中国であれ、移民の出身地であった他国になっていた、そういうことになる。ですからこうした地理からは解放されねばならない。公的言説が一九四二年から過去を始めるという意味がそこにあつたと分析を加えています。

最後に結論ですが、このグローバル・シティという言説、あるいは記憶には、大きなジレンマが含まれていると指摘しています。ダイアナ・ウォンのこの論文の冒頭に引用があるように、シンガポール政府は、グローバル・シティとしてのシンガポールは、その未来のために何よりもナショナル・ムアリング、すなわち国民をつなぎとめる場所として評価されなければならないということを繰り返し言っているそうです。そして、シンガポールを「ホーム」ではなくて「ホテル」とみなすコスモポリタンの危険に警鐘を鳴らしています。「ホテル」と「ホーム」を分かつものは、「ホーム」に満たされた記憶にあり、それを知る政府は、公的記憶、集合記憶をこのグローバル・シティのなかに精神的に創出しているのだけれども、しかしそこに含まれる地理の否定によって、こうした公的な記憶は、地方特有の記憶、すなわちヴァナキユラーな記憶の存在を認めることができないですから、人々の深い喪失感と過去への渴望はいやされないだろうと、結んでいます。

以上がダイアナ・ウォンの記憶をめぐるこれまでの仕事と、今日提出されている論文の要約です。

続いて簡単にコメントをさせていただきたいと思います。きのう帰りがけにEメールを開けてみますと、彼女からのEメールが入っていて、「日本での会議なのでグローバル・シティの記憶のジレンマを、日本の場合と対比するのが焦点になるでしょう」と書いてありました。しかし、この点については、彼女の論文の中にはたつた一行しか書いてないので、彼女に代わってこの議論を展開するのは、なかなか困難です。

ただ、たつた一行しか書いてないのですけれども、脱亜論以来、日本のなかにある地理と過去を否定しようとする衝動、すなわちアジアに位置するその地理と、それからアジアと取り結んできた過去を否定し、グローバル化ということに向けて、過去を振り捨てていこうとする日本の姿と、現在グローバル・シティとしての記憶を公式な歴史へと刷り込んでいこうとするシンガポールが、ダイアナには重なうて見えているようです。これは、コメントとは言いがたい指摘ですが。

それからもう一つは、先ほど午前中に行われました第二セッションの議論と深く関係しますが、ダイアナはこの論文およびその前の論文でも、オフィシャル・メモリーに対して、ヴァナキユラー・メモリーを提示して終わっています。この点に関しては、問題はここで果たして終わっているだろうか、むしろ始まっているのではないかという思いは、やはりどうしても残るのではないでしょうか。

シンガポール、これからお話があるベトナム、あるいは私がやっている

すビルマなど、東南アジアの国々を研究していますと、ひじょうに権威主義的な国家体制がそこに存在している。こういう地域においてはとりわけ歴史家の重要な仕事として、ヴァナキュラーな記憶の掘り起こしが意識されます。土地に結びついたマイノリティの記憶や、地方的な記憶を掘り起こし、それによってカウンター・ヒストリーを提出し、公的な言説や国史を相対化することが重要な課題であるということは、異論のないことだと思われまふ。多くの東南アジアの歴史家が、そうした努力を行っていると云って間違いないと思いますが、それは確かに妥当で重要な課題だといえるでしょう。

しかし、ヴァナキュラーとオフィシャルを対比するということはどういうことか、一昔前にしばしば行われた支配―被支配の二項対立的な図式と異なっているか、そもそもヴァナキュラーとは何かというような点に関しては、まだ議論が十分に行き届いていないと思えます。例えば私の研究対象地域であるビルマは、現在でも軍政下であり、国軍中心史観からはみ出す記憶は、これを国内で公的に表出することはまったく許されません。国軍を批判することも許されません。すべての印刷物には表紙の裏に「我々の願い」という文章が印刷されています。誰の願いかと問いつくとはゆるされません。軍事政権が決めた「あるべきビルマ国民」が願わねばならない事柄です。すなわち、国を分裂させないこと、国軍を父母と想って愛することなどです。そういう地域においては、カウンター・ヒストリーを書いてゆくということが、歴史家の重要な課題として浮上してくるわけですが、隠されている、あるいは抑圧されているヴァナキュラーな記

憶をどう掘り起こすかという問題とともに、ヴァナキュラーということ自身の意味も絶えず問われていると考えます。場合によっては、ひじょうに反民主主義的なあるいはよりバイオレントな記憶が表出してくることもあり得るわけです。こういう問題を、ダイアナはどういうふうに展開するのでしょうか。この論文は、シンガポールの記憶と忘却の政治を腑分けしたすばらしいアナトミーだとは思いますが、ヴァナキュラーな記憶を対置するだけで、そして記憶に主語を入れることだけで済むのだろうかというのは、コメントというよりは、私自身が考えている疑問点です。どうもありがとうございます。(拍手)